

# 高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察

## —生きがい・幸福感との関連を中心に—

1. はじめに
2. 研究方法
3. 研究結果
4. 考 察
5. 今後の研究課題

長谷川 明 弘\*  
 藤 原 佳 典\*\*  
 星 旦 二\*\*\*

### 要 約

「生きがい」という言葉は日本独特の意味を持っており、様々な概念を包括している。本論文の目的は、国内外の「生きがい」研究で報告された定義や関連要因を含めた研究成果を整理し、新しく「生きがい」の定義を概念規定し、今後の課題と研究の方向を考える際の資料とすることである。これまでに発表された文献を概観し「生きがい」を次のように新しく定義した。「生きがい」とは、「あなたの『生きがい』は何か」と尋ねられた時に、思い浮かべる「(「生きがい」の)対象」と、これと同時に湧いてくる「(「生きがい」の対象に)伴う感情」を統合した心の働きである。「対象」には過去の経験、現在の出来事、未来のイメージが含まれ、「伴う感情」には自己実現と意欲、生活充実感、生きる意欲、存在感、主動感といった種々の感情が含まれる。

今後の研究の展開の中で「生きがい」を測定できる簡便な尺度や定型化された質問が完成すれば、医療・保健・福祉・老年学領域だけでなく日本文化を探る独創的な研究が可能となってくるであろうし、国内外の地域による違いも検討できるようになる可能性がある。また「生きがい」は個人の生き方の指針ともなりうるので心理学・教育学・哲学など学際的な研究課題といえる。

### 1. はじめに

「生きがい」という言葉は日本独特の意味を持つ

ており、外国語に翻訳する事が難しい言葉である。あえて英語に訳すならば self-actualization (自己実現) や meaning of life (人生の意味)、purpose in life (人生の目的) となり、日本語の「生きがい」は様々

\*東京都立大学都市科学研究科 (博士課程)

\*\*東京都老人総合研究所地域保健部門

\*\*\*東京都立大学都市科学研究科

な概念を包括している。

老年学領域ではこの「生きがい」に近年注目している。「生きがい」と関連が強いといわれている生活満足度や主観的幸福感と productivity ならびに主観的健康感（健康度自己評価）や社会的ネットワークとの関連性が論じられて、これらの尺度は社会調査で用いられている<sup>1)</sup>。

このように老年学で「生きがい」研究が盛んになった背景には、今後急速な高齢社会を迎えるにあたり、前向きに生活する高齢社会を築くための理論研究の基礎として「生きがい」研究が大きな意味を持ってくるからである。

本論文の目的は、国内外の「生きがい」研究で報告された定義や関連要因を含めた結果を整理し、新しく「生きがい」の定義を規定し、今後の課題と研究の方向を考える際の資料とすることである。

## 2. 研究方法

社会老年学、老年社会科学といった学術誌を中心に2001年3月までに発表された「生きがい」と表題のついた文献を入手した。このほかにインターネット上の書店で「生きがい」と入力し、検索された文献で古書店を含めて入手可能なものを用いた。同時に「生きがい」と関連があるといわれている「人生満足度」、「モラル尺度」や「主観的幸福感」に関する国内外の論文を入手した。

## 3. 研究結果

### 3. 1 日本における「生きがい」研究の歴史

現在まで日本で「生きがい」について報告されたものは9件である(表1)。以下の表では関連要因も掲載し、考察で論ずることにする。

1966年に執筆された神谷美恵子<sup>2)</sup>による「生きがいについて」は今日までの「生きがい」研究の中で最も体系化された研究の一つとして位置づけられよう。神谷は「生きがい」という表現の中にもっと具体的、生活的なふくらみがあることを指

摘している。神谷は「生きがい」を「生きがい」の源泉、または対象となるものを指している場合と、「生きがい」を感じている精神状態を意味するときの2つの要素に分けて考えている。その根底には次の7つの欲求、すなわち①生存充実感への欲求、②変化への欲求、③未来性への欲求、④反響への欲求、⑤自由への欲求、⑥自己実現への欲求、⑦意味と価値へ欲求があると論じていた。

見田<sup>3)</sup>は社会調査の結果から「生きがい」を、未来と現在、他者と自己との相乗的・相互媒介的な構造であると定義した。野田<sup>4)</sup>は公刊資料から、生きがいの質的傾向が集団参加志向に傾き、家族が集団参加志向型生きがいの対象になってきたことを述べ、自治体の事業参加には家族内の集団参加志向を基底にして政策に組み入れることを提案した。井上<sup>5)</sup>は自身の体験や文献から、生の実感を生きがいの「機能的側面」を指しているとし、明るい生きがいだけでなく他を悩ますことや他を憎んだり恨んだりすることに生きがいを見出す人もいることを論じた。小林<sup>6)</sup>は国内外の「生きがい」に関する文献をまとめ上げ、「生きがい」を複合的な要素の組合わさったもので、一番大きなものが自己実現である。生きがいのなかみには自己実現、出会い、生きる価値、愛、仕事、在ること、仕事の各要素が一体になって生きがいを形づくっているとした。小林はマズローのいう基本的欲求と心理的成熟の2つを土台としてその上に「生きがい」があり、「生きがい」は外部からの圧力(うつ病、死の告知など)によって消失しやすいものと定義していた。柴田<sup>7)</sup>は、老年学の研究から「生きがい」を従来の QOL に、なにか他人のためにあるいは社会のために役立っているという意識や達成感が加わったものであることを追加した。

近藤ら<sup>8)</sup>と鎌田ら<sup>9)</sup>は科学的手法を用いて質問紙を作成した。彼らは高齢者の「生きがい」感スケールを作成し妥当性と信頼性を検討した。そこから自己実現と意欲、生活充実感、生きる意欲、存在感といった4つの因子が抽出された。また高齢者の生きがい感を「何ごとにも目的を持って生きていく張り合い意識である、また何かを達成した、向上した、人に認めてもらっていると思える

ときにも感じられる意識」と操作的定義を行った。

高橋<sup>10)</sup>は「生きがい」について日本と欧米やアジアの国々8カ国を比較し、日本人の「生きがい」を「自立」、「家族の絆」、「アソシエーション(目的的な個人参加の組織集団)」という軸で考えられるとした。

### 3. 2 海外における「生きがい」研究

海外では日本語での「生きがい」を表す言葉が存在しないため、生きがいと関連があると考えられる研究を紹介せざるを得ない。ここでは妥当性や信頼性の検討が多くなされた代表的な研究を4件紹介する(表2)。これらを日本語でいう「生きがい」と区別するため「生きがい意識」と表現することにする。

Neugarten, et al.<sup>11)</sup>は生活満足度目録(Life Satisfaction Index A; 以下LSIと表記)を作成した。心理的幸福は、①日常生活におけるいろいろな活動の中に喜びを見いだしているかどうか(熱意 zest 対無関心 apathy)、②自分の人生を意義あるもの meaningful と感じ、これまでの人生をはっきりと受け入れているかどうか-(決意 resolution と不屈の精神 fortitude)、③これまでの生活において、自分の人生の主な目的を達成し得た、と感じているかどうか-願望と達成された目標の間の調和 congruence between desired and achieved goals、④積極的、肯定的な自己概念をもっているかどうか-肯定的な自己概念 positive self-concept、⑤しあわせな、楽天的な態度、もしくは気分であるかどうか-気分の特徴 mood tone といった5つの要素から成り立っているという前提に基づいていた。

Lawton<sup>12)</sup>はPGCモラルスケール(Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: 以下PGC)を作成した。当初22項目で作成されたが、改訂版では17項目に修正されている。因子分析の結果、このスケールは3つの因子、すなわち心理的動揺・安定に関わる因子(Agitation)、自分の老化について態度に関わる因子(Attitude toward Own Aging)、孤独感・不満感に関わる因子(Lonely Dissatisfaction)から成っているとされた。

Larson<sup>13)</sup>は米国における過去30年にわたるモ

ラル、生活満足度、幸福度の研究を見直し、それらの上位概念として主観的幸福感(subjective well-being)を提案した。

Crumbaughらは第二次大戦中にナチスの迫害を受けた経験がある精神科医Franklの実存分析の観点から精神因性神経症が、力動的に解釈されている従来の神経症と異なるものかどうかを知ることが最終的なねらいとし、「人生の意味、目的」という実存的概念の数量化を進めること、特に、Franklの記述した実存的欲求不満の状況を数量的に測定することを目指して、1964年にPurpose-in-Life Test(以下PIL)を考案した(佐藤<sup>14)</sup>)。

### 3. 3 海外の評価尺度を日本において標準化する試み

ここでは海外で作成された尺度を日本において妥当性や信頼性を検討した研究を中心に報告する(表3)。

LowtonらのPGCについては前田ら<sup>15)</sup>、古谷野<sup>16)</sup>、古谷野ら<sup>17)</sup>、杉山ら<sup>18), 19)</sup>が標準化を試みて、日本においても米国とほぼ同様の因子構造が確認された。古谷野<sup>20), 21), 22)</sup>や古谷野ら<sup>23), 24)</sup>はLSI、PGCだけでなくアメリカで開発された他の尺度を合わせて国内で再調査を行い、生活満足度尺度(LSI-K)を作成ならびに標準化した。横山<sup>25), 26)</sup>は多次元幸福感尺度を作成、標準化し幸福感を多次元的にとらえた。さらに幸福感と活動態度の違いを検討し、個人の持っている活動への態度やおかれている環境が幸福感に強い影響を与えていることを考察し、高齢化社会へのきめ細かい対応の必要性を提案した。Crumbaughらによって作成されたPILが1998年に岡堂らによって「PIL テスト日本版」として標準化されマニュアルとともに出版されている(佐藤<sup>14)</sup>)。

### 3. 4 「生きがい意識」を国内で検討する試み

海外との比較研究や生命予後の調査で用いられた「生きがい」の有無などを含めて「生きがい意識」を国内で検討したものはPIL2件、PGC11、その他5件の合計18件あった(表4)。

谷口ら<sup>27)</sup>は都市在宅老人を対象に性差を検討し

た。男女ともに「ADL」と「医療受診状況」が影響を及ぼすが、男性は「小遣い月額」が他の変数よりも最も大きな影響力を持ち、女性は「居住年数」がかなり強い影響力を持っていた。

河合<sup>28), 29)</sup>はPILを用いた研究の結果、女性の人生の意味が画一的で、一方で男性は多彩であることを明らかにし、人生に対する態度の差から生じていると考察し、さらに女性の世代間比較を行って自由回答において「子ども・家庭」と回答が集中し、その割合は青年群55%、成人前期群52%、中年期群41%となっていたと報告した。

杉山<sup>30)</sup>は高齢者のスポーツ活動が体力増進だけでなく、社交関係の保持が可能なることから「生きがい意識」も維持される傾向を持つことを指摘した。杉山<sup>31)</sup>は55歳前後の向老期年代に調査をし、積極的な姿勢で神経質でないことが「生きがい意識」の保持に強い関連性があることを報告した。杉山<sup>32)</sup>は高齢就労者に調査を行い、60歳代で、健康、持ち家と配偶者が健在であるといった日常生活基盤の重要性を指摘した。杉山<sup>33)</sup>は施設在園高齢者を対象に調査し、つまらないことを気にしないで対外的な活動へ積極的に関わり、肯定的な思考で、他罰的なほど「生きがい意識」を増強していることがわかった。

古谷野<sup>34)</sup>は心理的、社会的、医学的な学際的要因を検討した。男性は「小遣い月額」と「握力」が、女性は「知的能力」、「痛みの有無」、「学歴」が「生きがい」意識に大きく影響していることを報告していた。同様に山本<sup>35)</sup>の結果からは「死への不安」が弱く、「死生観」が良質で、「情緒的サポート」を強く感じるものが影響していることが報告されている。

石原<sup>36)</sup>はQOL評価表を作成する中で、「満足感」、「心理的安定感」、「生活のハリ」の3因子を抽出した。この中で生きがいの有無を尋ねた項目を含めた「生活のハリ」因子に健康群と疾患群の間に差が生じた理由として、疾患群において主体性や積極的な行動が疎外されているためであると考察していた。

内藤<sup>37)</sup>は主観的幸福感と自覚健康度(主観的健康感)の関係を検討し、「どうき、息切れがする」、

「胃のぐあいが悪い」、「せき、たんがでる」の3項目が主観的幸福感の独立した指標となりうることを明らかにした。藤田<sup>38), 39)</sup>は大都市部、地方都市部、農村部の3つの地域差について検討し、「満足感」の低い人が農村部に居住していることを報告した。谷口<sup>40)</sup>はライフイベントとの関係を検討し、「健康」、「職業での成功」、「子どもに関する恵まれた体験」が良い影響を与えることを見出した。下仲<sup>41)</sup>も同様にライフイベントの影響を検討し、良いイベントは良い影響を、悪いイベントは2年後にも悪い影響を及ぼしていることを示し、縦断研究でさらに検討すべきことを指摘した。前田<sup>42)</sup>は縦断研究を行った結果、男性は「配偶関係」、「痛み」、「主観的健康感」、「活動水準」が、女性には「主観的健康感」がそれぞれ変化した場合にPGCに影響を及ぼすことを報告した。同様に前田<sup>43)</sup>は縦断研究でADLと性差が大きい影響を持っていることを報告した。男性は「年齢」、「教育歴」が増すとPGCが高くなり、「配偶者」を無くすとPGCが低下する。女性は「ADL」が低下するとPGCも低下する結果となっていた。

本間<sup>44)</sup>、中西<sup>45)</sup>は、縦断研究の中で生命予後を検討した。前者では生きがいの存在が活動的余命や生命予後の延長と関連することを示唆しているが、後者は有意な関連を認めなかった。

## 4. 考 察

### 4. 1 先行研究からみた関連要因のまとめ

Larson<sup>13)</sup>は1979年に主観的幸福感に関して過去30年間の研究を概観し、関連要因について整理を行っている。ここではLarsonの研究を参考にし、その後追加された関連要因を含めて論ずる。

年齢が増すと「生きがい」意識が低下することを杉山<sup>31), 32)</sup>、前田<sup>43)</sup>が示した。杉山<sup>31)</sup>は女性が低くなったとした一方で藤田<sup>39)</sup>は性差が大きいことを報告した。健康は杉山<sup>19)</sup>、古谷野<sup>22)</sup>、藤田<sup>39)</sup>、前田<sup>42)</sup>、杉山<sup>31)</sup>、谷口<sup>40)</sup>など6件の研究結果で強い影響力を持っていることを報告していた。ADLは谷口<sup>27)</sup>、藤田<sup>39)</sup>と男性のみ

に前田ら<sup>42)</sup>が影響があるとした。現在の医療受診状況について前田ら<sup>14)</sup>、谷口ら<sup>27)</sup>、身体的痛みは藤田ら<sup>39)</sup>と男性のみの影響を前田ら<sup>42)</sup>が、小遣い月額は前田ら<sup>15)</sup>と男性のみの影響を谷口ら<sup>27)</sup>が示していた。教育年数は藤田ら<sup>39)</sup>、過去の職業地位の高いことを谷口ら<sup>40)</sup>、最長職がサラリーマンであることを杉山ら<sup>31)</sup>、配偶者が健在であることが影響を示したのは杉山ら<sup>19)</sup>、<sup>31)</sup>であったが前田ら<sup>42)</sup>、<sup>43)</sup>は男性のみの影響力を示した。子どもと同居予定の場合に高くなることを杉山ら<sup>31)</sup>が報告した。居住年数との関連は前田ら<sup>14)</sup>と谷口ら<sup>27)</sup>が女性のみに関連していたことを示した。持ち家があることを杉山ら<sup>19)</sup>、<sup>31)</sup>、社会的相互作用は杉山ら<sup>19)</sup>、<sup>31)</sup>と古谷野<sup>22)</sup>が、サークル活動に未加入であることを杉山ら<sup>31)</sup>が、趣味は杉山ら<sup>19)</sup>と谷口ら<sup>40)</sup>、スポーツは杉山ら<sup>30)</sup>、谷口ら<sup>40)</sup>、地域差を藤田ら<sup>39)</sup>、活動的余命や生命予後の短縮には本間ら<sup>44)</sup>がしかし中西ら<sup>45)</sup>は性と年齢をコントロールした場合は認めたと、障害や健康管理の影響を除いたら関連がなくなった。

横山<sup>25)</sup>は社会的活動だけでなく個人でできる活動に対しての意味づけの大切さを報告していた。杉山ら<sup>31)</sup>は家計の中心であることと知的啓蒙を促す専門書の読者であることをあげている。山本ら<sup>35)</sup>は情緒的サポートを強く認識するほど高くなることを報告していた。

以上から「生きがい」には健康と年齢、受診状況、教育年数、最長の職種、同居者あるいは同居予定者、居住形態、地域差との相互関連性の高さを実証しており、「生きがい」研究を進めていく上では、これらの側面からの調査を総合的に把握する必要がある。

しかし年齢やADL、身体的な痛み、配偶者、居住年数は性別によっても差が出ていた。これらを今後も調査に組み込んで相互的な関連を検討する必要がある。

同じく結果が一致していない小遣い月額、社会的な相互作用、趣味、スポーツは測定方法がバラバラであることも一因であると考えられるので概念整理の上、標準的な測定方法を開発した上での検討が必要であろう。

#### 4. 2 「生きがい」の測定方法

日本においては、文献調査が多く、実証調査によって測定された研究数は10にも満たない<sup>2)-7), 10)</sup>。つまり国内における「生きがい」の先行研究はほとんどが思弁的で特定の価値観や恣意的な意味合いが混じり合った報告が多かった。一方で海外で作成されたスケールを使用してデータを取り、PGCを中心に国内で標準化し主としてアメリカとの比較研究が多くなされてきた<sup>14)-45)</sup>。

わが国では主観的健康感や社会的ネットワークだけでなく生活満足度、主観的幸福感、productivity、QOL尺度、Locus of control、Self-esteem尺度、高次生活機能についての尺度や、例えばわが国で作成された「老研式活動能力指標」が調査に用いられている。これらの概念も「生きがい」と関連が強いように考えられるが調査の中では、それぞれを織り交ぜた研究が多かった。今後は「生きがい」の調査法開発と同時にそれぞれの尺度とを併せて比較検討することが必要となろう。

さらに今回報告した調査自体20年前後も前のデータがほとんどである。調査時期だけでなく横断研究において世代差も生ずるであろう。いうまでもなく縦断研究によっても検討されなければならない。

#### 4. 3 「生きがい」の定義とモデル

今回考え出された「生きがい」の定義を次のように新しく設定した。『「生きがい」とは、「あなたの生きがいは何か」と尋ねられた時に、その人が過去の経験、現在の出来事、未来のイメージといった「(「生きがい」の)対象」を心に思い浮かべ、同時に伴って湧いてくる自己実現と意欲、生活充実感、生きる意欲、存在感、主動感といった種々の感情、つまり「(「生きがい」の対象に)伴う感情」を統合した自己の心の働きである。』

またこの問いかけに対し何も思い浮かばない時には「生きがい」が無いということになる。この定義では対象が存在しなくて伴う感情のみが存在することも想定されるし、その逆もあり得る。さらに伴う感情は今回近藤ら<sup>8)</sup>、鎌田ら<sup>9)</sup>の成果以外

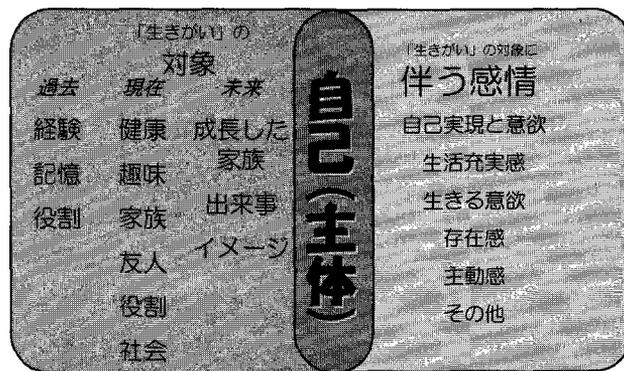


図1 「生きがい」の構成要素  
-文献研究から作成したモデル構成-

に定義に活用できるデータが存在しないが今後の研究成果で追加されうるものである。主動感は成瀬<sup>46)</sup>によると、「すべて自分が主となって動いているという実感を持った動き」であると定義している。ここに主動感を追加した理由は、人が日常生活の中でこの主動感が根底にあって生きていると考えられるからである。

この「生きがい」の定義において自己すなわち主体が今ここに存在し、「生きがい」が生じてくる対象、つまり「対象」と、そこから生ずる気持ちすなわち「伴う感情」を設定した。これを図で示すと上記のようになる(図1)。今回の定義の大きな特徴は、「生きがい」を対象と伴う感情に分けて考え、対象に時間軸を組み入れたことである。この対象での時間軸を入れた理由は、高齢者が現在ここで生活している事象だけでなく、これまで生きてきた過去の事象や少し先の未来における事象という一連の時間経過の中にいるからである。このことが他の世代とは対象が異なってくることが予想される。

## 5. 今後の研究課題

### 5. 1 「生きがい」そのものを測定する尺度の少なさ

最も強調したいことは、近藤ら<sup>8)</sup>、鎌田ら<sup>9)</sup>以外に日本で「生きがい」そのものを測定することを

目的とした研究がなかったことである。PGC や LSI など海外で作成された尺度は元来「生きがい」を測定することを狙って開発されたものではない。

今後は例えば「生きがい」の有無や程度といった目的変数やその対象となる説明変数を明らかにして実証研究をする必要がある。また生きがいの構造や規定要因についてもまだわかっていない。

今回考え出されたモデルでも「生きがい」の対象と伴う感情の関係もわかっておらず、データから明らかにしていく部分が残っている。

### 5. 2 介入研究の方向性

「いきいきづくり」、「生きがいづくり」という名称は自治体の高齢者対象の事業名に多く標榜されている。「生きがい」が測定されれば「健康日本21」にみられるようにデータに基づいた評価という視点で自治体と研究機関が協働して「生きがい」を高めることを設定目標とした介入研究ならびに事業展開が可能となる。

### 5. 3 生活形態の変化による地域差

Felton et al.<sup>47)</sup>は都市部と郊外部の居住者を比較し、郊外部の PGC 得点が高かった一方で、都市部居住者は団体によく参加し、友人との交際が多いが、友人関係に満足していなかった。都市では社会的ネットワーク、郊外では健康状況が PGC に影響していた。Fengler et al.<sup>48)</sup>は1969年に作成された

Bradburn の Life satisfaction measure (以下 LSM) を用いて調査し、非都市部の居住者が暮らし向きが良いと感じて LSM に影響を及ぼし、都市部居住者が移動の便利さや団体への加入が LSM に影響を及ぼしていたという。Liang et al.<sup>49)</sup> は都市生活全般に大きな影響を与え、特に健康や金銭的な満足度や主観的な社会統合(孤独感、他者との意義深い関係、統合された感じ、家族や友人から分離した感じ)が大きく影響していたことを報告している。国内では藤田ら<sup>37),38)</sup> によって農村部に居住することが「満足感」を低くすることが報告されている。今日は地域によって交通や家族形態など生活が多種多様に変化してきているので「(生きがいの)対象」が居住場所によって変化することが予想される。居住場所が国内だけでなく国別での比較も必要となろう。

#### 5. 4 集団から個人へ

「生きがい」の比較研究は、年齢層や居住地域など集団によって差違が検討されてきているが最終的には世代を問わず個人に帰結する研究となるべきであろう。様々な生き方を選択できるようになった現在、これまで以上にすべての世代において自分の生き方を見つめ直すキーワードとしての「生きがい」の在り方が重要となってくる。

#### 5. 5 まとめ

「生きがい」を測定できる簡便な尺度や定型化された質問が完成すれば、医療・保健・福祉・老年学領域だけでなく日本文化を探る独創的な研究が可能となってくるであろうし、国内外の居住地域による違いも検討できるようになる。また「生きがい」は個人の生き方の指針ともなりうるので心理学・教育学・哲学など学際的な研究課題といえる。このように「生きがい」研究は始まったばかりで多くの課題の宝庫だと考えられる。

#### 参考・引用文献

- 1) 東京都老人総合研究所(編)『サクセスフル・エイジングー老化を理解するためにー』ワールドプランニング, 1998.
- 2) 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房, 1980.
- 3) 見田宗介『現代の生きがいー変わる日本人の人生観ー』日本経済新聞社, 1970.
- 4) 野田陽子「老年期の生きがい特性」, 『老年社会科学』Vol. 5, p.114-128, 1983.
- 5) 井上勝也「老年期と生きがい」, 『老年社会科学』Vol. 10, p.243-254, 1988.
- 6) 小林司『「生きがい」とは何かー自己実現へのみち』日本放送出版協会, 1989.
- 7) 柴田博「求められている高齢者像」, 東京都老人総合研究所(編)『サクセスフル・エイジング』ワールドプランニング, p.42-52, 1998.
- 8) 近藤勉・鎌田次郎「高齢者の生きがい感スケール(K-1式)の作成及び生きがい感の定義(その1)」, 『老年社会科学』Vol.22, p.181, 2000.
- 9) 鎌田次郎・近藤勉「高齢者の生きがい感スケール(K-1式)の作成及び生きがい感の定義(その2)」, 『老年社会科学』Vol.22, p.182, 2000.
- 10) 高橋勇悦「生きがいの社会学」高橋勇悦・和田修一(編)『生きがいの社会学ー高齢における幸福とは何か』弘文堂, p.269-290, 2001.
- 11) Neugarten, B., Havighurst, R., and Tobin, S., "The Measurement of Life Satisfaction", *Journal of Gerontology*, Vol.16, pp.134-143, 1961.
- 12) Lawton, M.P., "The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale:A Revision", *Journal of Gerontology* Vol.30, pp.85-89, 1975.
- 13) Larson, R., "Thirty Years of Research on the Subjective Well-Being of Older Americans", *Journal of Gerontology*, Vol.33, pp.109-125, 1978.
- 14) 佐藤文子「PIL(Purpose-in-Life)テスト日本語版」, 上里一郎(監修)『心理アセスメントハンドブック第2版』西村書店, p.382-395, 2001.
- 15) 前田大作・浅野仁・谷口和江「老人の主観的幸福感の研究ーモラル・スケールによる測定の試みー」, 『社会老年学』Vol. 11, p.15-31, 1979.
- 16) 古谷野巨「生きがいの測定ー改訂 PGC モラルスケールの分析ー」, 『老年社会科学』Vol. 3, p.83-95, 1981.
- 17) 古谷野巨・柴田博・芳賀博・須山靖男「PGC モラル・スケールの構造ー最近の改訂作業がもたらしたものー」, 『社会老年学』Vol. 29, p.64-74, 1989.
- 18) 杉山善朗・竹川忠男・佐藤蒙・他「老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本版 PGM の作成(1)ー尺度の信頼性および因子的妥当性の検討ー」, 『老年社会科学』Vol. 3, p.57-69, 1981.
- 19) 杉山善朗・竹川忠男・中村浩・他「老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本版 PGM の作

- 成(2)－実際の妥当性の検討－, 『老年社会科学』 Vol.3, p.70-82, 1981.
- 20) 古谷野亘「モラルスケール、生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度感の関連性」, 『老年社会科学』 Vol. 4, p.142-154, 1982.
- 21) 古谷野亘「モラルスケール、生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度感の関連性(その2)」, 『老年社会科学』 Vol. 5, p.129-142, 1983.
- 22) 古谷野亘「主観的幸福感の測定と要因分析－尺度の選択が要因分析に及ぼす影響について－」, 『社会老年学』 Vol. 20, p.59-64, 1984.
- 23) 古谷野亘・柴田博・芳賀博・他「生活満足度尺度の構造－主観的幸福感の多次元性とその測定－」, 『老年社会科学』 Vol. 11, p.99-115, 1989.
- 24) 古谷野亘・柴田博・芳賀博・他「生活満足度尺度の構造－因子構造の不変性－」, 『老年社会科学』 Vol. 12, p.102-116, 1990.
- 25) 横山博子「主観的幸福感の多次元性と活動の関係について」, 『社会老年学』 Vol. 26, p.76-88, 1987.
- 26) 横山博子「主観的幸福感と活動の関係について－活動に対する態度の観点から－」, 『老年社会科学』 Vol. 11, p.151-166, 1989.
- 27) 谷口和江・前田大作・浅野仁・他「高齢者のモラルにみられる性差とその要因分析」, 『老年社会科学』 Vol.20, p.46-58, 1984.
- 28) 河合千恵子「老人における「人生の意味」意識－PIL テストを用いて－」, 『老年社会科学』 Vol.3, p.96-110, 1981.
- 29) 河合千恵子「女性における「人生の意味」意識－世代比較的研究－」, 『社会老年学』 Vol.15, p.52-63, 1982.
- 30) 杉山善朗・中村浩・斎藤和雄・他「高齢者のスポーツ活動と「生きがい」意識との関連」, 『老年社会科学』 Vol.8, p.161-176, 1986.
- 31) 杉山善朗・竹川忠男・佐藤蒙・他「向老期年代層(50歳～59歳)の「生きがい」意識に関する研究」, 『老年社会科学』 Vol.7, p.122-136, 1985.
- 32) 杉山善朗・竹川忠男・佐藤蒙・他「高齢就労者の「生きがい」意識に関する研究」, 『社会老年学』 Vol.23, p.44-51, 1986.
- 33) 杉山善朗・中村浩・竹川忠男・他「施設在園高齢者の生きがい意識に関連する身体・心理・社会的要因の研究－ストレス・コーピング様式との関連－」, 『老年社会科学』 Vol. 12, p.117-126, 1990.
- 34) 古谷野亘・柴田博・前田大作・他「幸福な老いの指標とその関連要因－心理・社会・医学データからの学際的研究－」『老年社会科学』 Vol.6, p.186-196, 1984.
- 35) 山本直示・杉山善朗・竹川忠男・他「高齢者の「幸福感(wellbeing)」と「生きがい」意識を規定する心理・社会的要因の研究」, 『老年社会科学』 Vol.11, p.134-150, 1989.
- 36) 石原治・内藤佳津雄・長嶋紀一「主観的尺度に基づく心理的な側面を中心とした QOL 評価表作成の試み」, 『老年社会科学』 Vol.14, p.43-51, 1992.
- 37) 内藤佳津雄・石原治・長嶋紀一「主観的幸福感と自覚健康度の関係について」, 『老年社会科学』 Vol.11, p.166-182, 1989.
- 38) 藤田利治・旗野脩一・大塚俊男・他「長寿と「生きがい」」, 『医学のあゆみ』 Vol.132, p.981-986, 1985.
- 39) 藤田利治・大塚俊男・谷口幸一「老人の主観的幸福感とその関連要因」, 『社会老年学』 Vol.29, p.75-85, 1989.
- 40) 谷口幸一・大塚俊男・丸山晋・他「高齢者のパーソナリティに及ぼすライフ・イベントの影響」, 『老年社会科学』 Vol. 4, p.111-128, 1982.
- 41) 下仲順子・中里克治・河合千恵子・他「中高年期におけるライフイベントとその影響に関する心理学的研究」, 『老年社会科学』 Vol.17, p.40-56, 1995.
- 42) 前田大作「高齢者の“生活の質”－社会・行動科学的側面についての縦断的研究－」, 『社会老年学』 Vol.28, p.3-18, 1988.
- 43) 前田大作・坂田周一・浅野仁・他「高齢者のモラルの縦断的研究－都市の在宅老人の場合－」, 『社会老年学』 Vol. 27, p.3-13, 1988.
- 44) 本間善之・成瀬優知・鏡森定信「高齢者における身体・社会活動と活動的余命、生命予後の関連について－高齢者ニーズ調査より－」, 『公衆衛生雑誌』 Vol.46, p.380-390, 1999.
- 45) 中西範幸・多田羅浩三・中島和江・他「地域高齢者の生命予後と障害、健康管理、社会生活の状況との関連についての研究」, 『公衆衛生雑誌』 Vol.44, p.89-101, 1997.
- 46) 成瀬悟策『臨床動作学基礎』学苑社, p.250, 1995.
- 47) Felton, B.J., Hinrichsen, G.A. and Tsemberis, S., "Urban-Suburban Differences in the Predictors of Morale Among the Aged", *Journal of Gerontology*, Vol.36, pp.214-222, 1981.
- 48) Fengler, A.P. and Jensen, L., "Perceived and Objective Conditions as Predictors of the Life Satisfaction of Urban and Non Urban Elderly", *Journal of Gerontology*, Vol.36, pp.750-752, 1981.
- 49) Liang, J. and Warfel, B. L., "Urbanism and Life Satisfaction among the Aged", *Journal of Gerontology*, Vol.38, pp.97-106, 1983.

**Key Words** (キー・ワード)

**Elderly** (高齢者), **IKIGAI** (生きがい), **Well-being** (幸福感), **Morale** (モラール), **Life Satisfaction** (人生満足), **Purpose in Life** (人生の目的), **Definition** (定義), **Interdisciplinary** (学際), **Japanese Culture** (日本文化), **Life Style** (生き方)

表1 日本における「生きがい」研究

文献	著者(発表年)	目的	対象	調査方法
2	神谷美恵子 (1980)	生きがいという大きな問題はあまりあっさり片づけてすむものではなく、十分時をかけてよく考えてみなければ、と思ったのが本書を書いた主な動機の一つである。	らいを患い国立療養所での生活者、文献	質問紙法、面接法、文献調査
3	見田宗介 (1970)	—	1963年にテレビ局が2,639名に行った全国世論調査やそれをもとに1967年に見田自身が行った全国青壮年意識調査など社会調査を中心としたデータ	社会調査
4	野田陽子 (1983)	問題領域の拡大と諸問題への社会対応の多様化という社会過程を反映した社会的位置づけを持つ高齢者の生きがい特性を明らかにすること	厚生省の1979年から開始した「生きがいと想像の事業」に関する3回の調査結果	公開された資料
5	井上勝也 (1988)	老年期の生きがいを考察する。	文献による	文献調査
6	小林司 (1989)	人生を考える糸口として私がこの40年間に考えてきたことを記せば若い人には多少とも参考になるのではない。そんな気持ちが、私にこの本を書かせた。	文献による	文献調査
7	柴田博 (1998)	—	—	—
8	近藤勉・鎌田次郎 (2000)	生きがい感項目を作成選定、スケールを作成し本調査を行い、項目分析を行うこととする。	1999年7月大阪府老人福祉センター3カ所にて391名(男性190名、女性201名)	自記式
9	鎌田次郎・近藤勉 (2000)	高齢者の生きがい感スケールの妥当性、信頼性を検証、終わりに操作的定義を行う。	1999年7月大阪府老人福祉センター3カ所にて391名(男性190名、女性201名)に加えて概念的妥当性を検討するために老人大学生173名	自記式
10	高橋勇悦 (2001)	日本の高齢者の生きがいに関する国際比較の考察を通じて、日本人が抱えている生きがいの特質を明らかにすること	イタリア・フランス、デンマーク、アメリカ、シンガポール、台湾、中国・韓国から数名ずつ	面接法

生きがいを測定するのに使用した 質問紙など	結果(定義)	関連要因
なし	「生きがい」を「生きがい」の源泉、または対象となるものを指している場合と、「生きがい」を感じている精神状態を意味するときの2つの要素に分けた	
なし	「生きがい」は、未来と現在、他者と自己との相乗的・相互媒介的な構造である	
なし	生きがいの質的傾向が集団参加志向に傾く。家族が集団参加志向型生きがいの対象となってきた。事業参加には家族内の集団参加志向を基底にする	
なし	生の実感は生きがいの「機能的側面」のことである。明るい生きがいだけでなく他を悩ますことや他を憎んだり恨んだりすることに生きがいを見出す人もいる。	
なし	「生きがい」を複合的な要素の組合わさったもので、一番大きなものが自己実現である。生きがいのなかみには自己実現、出会い、生きる価値、愛、仕事、在ること、仕事の各要素が一体になって生きがいを形づくっている。	
なし	「生きがい」とは、従来のQOLに、なにか他人のためにあるいは社会のために役立っているという意識や達成感が加わったものである。外国においても日本語のまま「イキガイ」として使用してもらおうのがよいと考えている。	
1999年4月に実施された生きがい感についての概念調査をもとに43項目を考案し心理学の専門家5人で評決して18項目を選定した。生きがい感の程度を測るセルフアンカリングスケール	項目分析の結果、弁別性の悪い2項目を除外して16項目とした。斜交解による因子分析の結果第1因子は「自己実現と意欲」、第2因子は「生活充実感」、第3因子は「生きる意欲」、第4因子は「存在感」と命名された。	
1999年4月に実施された生きがい感についての概念調査をもとに43項目を考案し心理学の専門家5人で評決して18項目を選定し、さらに項目分析の結果、弁別性の悪い2項目を除外して16項目とした。	生きがい感スケールの基準関連妥当性、概念的妥当性、再検査法、内的整合性が検証され、生きがい感を「何ごとにも目的を持って生きていく張り合い意識である、また何かを達成した、向上した、人に認めてもらっていると考える時にも感じられる意識といえよう」と操作的定義をした。	
なし	国際調査から日本人の「生きがい」は「自立」と「家族の絆」、「アソシエーション(目的的な個人参加の組織集団)」という軸で考察できた。国際比較が示唆したことは日本人の生きがいは、自己実現に傾斜し始めているように思われることである。	

表2 海外における「生きがい意識」研究

文献	著者(発表年)	目的	対象	調査方法
11	Neugarten, B. et al. (1961)	面接で得られた人生満足度の評定から人生満足度目録を作成すること	1956年カンサス市の50歳から90歳の177人の男女	面接調査法
12	Lawton, M.P. (1975)	PGC モラールスケールのさらなる分析を今回報告し、考慮した項目と因子を推奨すること	1086人の居住者から記入漏れのない828名	記載なし
13	Larson, R. (1978)	過去30年に人生満足、モラール、安堵の研究が60以上もなされてきた。前半では生活状態の測定技法を概観し、後半ではこれらの尺度での研究結果を概観すること。	過去30年にわたる文献	文献調査
	Crumbaughら (1964) 佐藤 <sup>14)</sup> より引用	Franklの記述した実存的欲求不満の状況を数量的に測定すること	不明	不明

生きがいを測定するのに使用した質問紙など	結果(定義)	関連要因
なし	①熱意対無関心②決意と不屈の精神③願望と達成された目標の間の調和④肯定的な自己概念⑤気分の特徴という操作的な定義をして、人生満足度評定(Life Satisfaction Ratings:LSR)を作成した。LSRと上記の操作的定義を踏まえて2つの型の人生満足度目録(Life Satisfaction Index:LSI)が考案された。	年齢、性、社会階級
Lawton,M.P.らが開発したPhiladelphia Geriatric Center Morale Scale(以下 PGM)の22項目	①動揺、②自分自身の加齢への態度、③孤独への不満足の因子が抽出され17項目が妥当とされた。	
なし	過去の研究を振り返り「主観的幸福感」としてまとめられた。	年齢、性別、人種、健康、社会経済状況、雇用、結婚の有無、乗り物と居住、活動性、社会的交流
不明	Purpose-in-Life Test(PIL)を考案した。Part A は個人がどの程度「人生の意味、目的」を体験しているかを20の間に7件法で尋ねる態度スケールで量的なデータが、Part B は13項目の文章完成法、Part C は自由記述となっており質的なデータが得られる。	不明

表3-1 日本において標準化を試みた研究

文献	著者(発表年)	目的	対象	調査方法
14	佐藤文子 (2001)	日本においても近年 PIL に対する関心が高まり、研究などに使用されることも多くなっており、日本版 PIL の早急な標準化が望まれた。	ハンドブックやマニュアルに詳述	ハンドブックやマニュアルに詳述
15	前田大作・他 (1979)	老人の「生きがい」の水準を科学的に測定するための研究はほとんど行われていない。そこでわれわれは、老人のための社会福祉政策の企画あるいはまた社会福祉実践の基礎として、いわゆる「生きがい感」の水準測定の方法を開発することを試みた。	東京都区部所在の老人福祉センター及び老人大学利用者 229 人(男 122 人女 107 人)	面接調査法
16	古谷野亘 (1981)	改訂版 PGC モラル・スケールが日本の老人にも適用できることを確認するために、日本の高齢者を実施した調査結果によってその因子構造を明らかにし、それにもとづいてスケールの信頼性を推定すること。	1979 年 11 月から 1980 年 5 月 60 歳以上の在宅高齢者で板橋区内 834 名と山梨県 1343 名を住民票から無作為抽出と東京都内の働く高齢者の会の会員と予備員合計 950 名から記入漏れのなかった、それぞれ 413 通、700 通、624 通を用いた。	板橋区は留置法、山梨と働く高齢者の会は郵送法で実施
17	古谷野亘・他 (1989)	共分散構造分析を用いたモラルの測定法に関する最近の研究と、それに基づいて行われた尺度の改訂作業が持つ意味について、データに即して検討していく。	1986 年 10 月の東京都小金井市悉皆調査の回答者の中から無作為抽出された 1100 名の回答の中から未記入のない 723 名(年齢 66-98 歳)	郵送調査
18	杉山善朗・他 (1981)	老人の適応感情や生活意欲、一言で言うならば「生きがい」意識の強さをはかるための自記式質問紙法として日本版 PGM の信頼性について確かめること。	1975 年から 1980 年に行われた北海道農村部、漁村部、小都市部の平均年齢 70 歳前後の高齢者 1349 名	不明
19	杉山善朗・他 (1981)	老人の「生きがい」意識 (Life Satisfaction) の強さを PGM(X-III) により測り、それに関与すると考えられる社会的諸特性との関連を検討し、PGM(X-III) の実際の・依存的妥当性を調べること。	北海道内の小都市在住の平均年齢 72 歳前後の高齢者合計 300 名の中から欠損のない 253 名	面接調査法
20	古谷野亘 (1982)	主観的幸福感を測定するための尺度の共通する最小数の有意味な次元を抽出し新しい測定尺度を作成すること	1981 年 4 月山梨県鯉沢町の 400 名に調査票配布し回収された中の 3 項目以上無回答のものを除いた 230 名分の調査票	配布し郵送で回収

生きがいを測定するのに使用した 質問紙など	結果(定義)	関連要因
Crumbaughら(1964)は、Franklの記述した実存的欲求不満の状況を数量的に測定することを旨として考案した Purpose-in-Life Test(PIL)	日本版とオリジナル版の違いは、年齢段階別に判定基準を出したこと、3つのパートになっている検査を数量化して客観的に評価できる分析法を考案したこと、さらに検討を重ねて1998年にハンドブックとマニュアルを出版した。改訂を機に「PIL テスト 日本版」を正式な名称とした。	
Lawton, M.P.らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scale(以下 PGM)の22項目と後半部では改訂版での17項目	因子分析の結果においてアメリカとの比較のために3因子を抽出した①楽天的・積極的気分-悲観的・消極的気分、②現在の健康・生活条件についての満足感-不満足感、③有用感-無用感であった。けれども第2因子しかの寄与率が非常に低いので確かなものであると言いはない。モラル得点への影響力を及ぼしているのは「現在の医療受診状況」、「居住歴」、「小使銭の大きさ」の3つであった。まともとしてPGCモラルスケールは日本の老人調査にも充分使用できる。	ADL、現在の医療受診状況、配偶者の有無、同居家族、学歴、活動レベルを調べ、クロスなどでは性別、年齢、ADL、現在の医療受診状況、配偶者の有無、世帯類型、就業状況、過去の地位と収入の良かった仕事、居住年数、活動レベル
改訂版 PGC モラル・スケール (Lawton, 1975)	因子数を3にとしたときに最適解を得た。「老いについての満足感」、「心理的安定」、「有用感」と命名された。Lawtonの「孤独感」に関する因子は抽出されなかった。	
Lawton, M.P.らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scale(以下 PGM)の改訂版での17項目を日本版に翻訳したもの	3つのモデルを使用し、各モデルのデータへの適合度を検討した。Liang, Asano, et al(1987)から構成されたモデルの適合度が最も高かった。しかしモラルの概念についての理論的検討やモラルの関連要因に関する測定法の開発がまだなされていないなど今後の研究課題も残った。	
Lawton, M.P.らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scale(以下 PGM)の22項目に日本人老人の特性や社会状況を配慮した9項目を追加した計31項目	31項目の中から項目分析をして11項目が除外されたPGM(X-III)が作成された。その後の因子分析で「精神的同様」、「身体健康」、「不全感」、「生活充足感」と未確定の因子の5因子が見出された。「生きがい」意識が複雑な多重構造を持つものであることが示唆された。また PGM(X-III)が相当程度の信頼性や因子的妥当性を有することが確かめられた。	
Lawton, M.P.らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scaleをもとに杉山らが日本版として標準化した PGM(X-III)	健康であること、趣味を持つこと、自発的なクラブ活動、持ち家に住んでいること、配偶者が健在であることが得点を増大させ、つまり「生きがい」を増強させることが明らかになった。	性別、年齢、配偶者、同居者、居住形態、現在の職業、教育年数、健康度、テレビと新聞の習慣、地域活動と趣味活動の有無
PGC, PGC 改訂版(Lawton)、PGC 改訂版(Morrisら)、DMS、LSIA、LSIA 改訂版(Adams)、LSIZ、シカゴ態度尺度幸福度下位得点、LISAの「楽天的気分下位得点」、「熱中対アパシー」下位得点、「目標と現実の一致」下位得点、「決断と不屈さ」下位得点	「人生全体についての満足感」、「楽天的・肯定的な気分」、「老いについての評価」の次元を代表する14項目から成る主観的幸福度の尺度、生活満足度尺度を作成	

表3-2 日本において標準化を試みた研究(つづき)

文献	著者(発表年)	目的	対象	調査方法
21	古谷野亘 (1983)	県立老人大学の受講者のデータによって、古谷野(1982)の追試を行い、必要な改訂を加えること。	栃木県立老人福祉大学の一年次受講者 150名から記入漏れのなかった135名分	郵送で回収
22	古谷野亘 (1984)	同一の被験者の主観的幸福感を、複数の尺度によって測定した調査データによって、主観的幸福感の要因分析を行い、主観的幸福感の測定値と関連要因の間の関連性の強弱が、測定に用いられる尺度の影響を明らかにすること	山梨県内老人福祉大会参加者 230名、栃木県立老人福祉大学受講者 135名	自記式
23	古谷野亘・他 (1989)	共分散構造モデルを用いて LSIK の内的構造の分析を行い、主観的幸福感の測定尺度としての構成概念妥当性について検討すること	1986年10月小金井市の調査の中から未記入のなかった723名	郵送調査
24	古谷野亘・他 (1990)	独立に集められた2組の在宅老人サンプルにおける LSIK の因子構造の異同を検討し、その不変性を吟味すること	1986年10月小金井市の723名と1988年7月京都府八幡市465名	小金井市は郵送調査八幡市は訪問面接調査
25	横山博子 (1987)	主観的幸福感と活動(社会的活動含む)を新しくとらえなおし、その両者の関係について考察すること	大阪府の老人大学受講生 250名、軽費老臣ホーム100名の有効サンプルは292名	自記式アンケート調査もしくは聞き取り調査
26	横山博子 (1989)	活動全般に対する態度の違いによって主観的幸福感と活動の関係がどうかかわるか	老人ホーム100名と老人大学250名の合計350名	自記式アンケート調査
27	谷口和江・他 (1984)	高齢者のモラルに影響を与える要因に、性別による違いが何らかの差異が見られるとする仮説の検証をするため	1982年9月から10月にかけて2段階無作為抽出による東京都内18区在住の60歳以上の男女500名から回収のできた345名	郵送留置法

生きがいを測定するのに使用した 質問紙など	結果(定義)	関連要因
「人生全体についての満足感」、「楽天的・肯定的な気分」、「老いについての評価」の次元を代表する14項目から成る主観的幸福感の尺度、生活満足度尺度を測定するLSIK	LSIK の改訂を行い9項目としたが標準化がなされたわけではない。	
PGC 改訂版(Lawton)、カットナーモラルスケール、DMS、LSIA 改訂版(Adams)、シカゴ態度尺度幸福度下位得点と古谷野の生活満足度尺度K(LSIK)	健康度自己評価や社会関係指標によって表される人間関係の豊かさが、老人のモラルや生活満足度を高めるものであるが、使用される主観的幸福感の尺度の種類によって測定値と年齢や性といった独立変数との間の相関関係が影響されていた。	年齢、性、健康度自己評価、医療受療状況、配偶者の有無、同居家族数、職業の有無、小遣月額、学歴、最長職、現在地居住歴、社会関係指標
生活満足度尺度(LSIK:古谷野ら,1989)はPGCモラルスケール、LSIAの分析から開発された9項目、3因子の測定尺度	古谷野(1982)が抽出した「人生全体についての満足感」、「心理的安定」、「老いについての評価」は、PGCモラル・スケールやLSIAによって測定されてきた主観的幸福感の3つの要素「認知-長期的」、「認知-短絡的」、「感情-短絡的」な要素に対応するものであった。LSIKを共分散構造分析した結果「主観的幸福感」の測定尺度として十分な公正概念妥当性を有するものであった。	
生活満足度尺度(LSIK:古谷野ら,1989)はPGCモラルスケール、LSIAの分析から開発された9項目、3因子の測定尺度	小金井サンプルと八幡サンプルともにモデルに極めて高い適合度が観察された。	
今回、多次元幸福感尺度を作成し、PGCモラルスケールも行った。	多次元幸福感尺度を作成し、主観的幸福感を多次元構造の形でとらえた結果、独立でなく階層的な構造がみられた。影響があったのは形態的側面では、社会的活動だけでなく一人でできる活動、個人の側からみた意味的側面で分類したら、当該活動に対して楽しみを見出しているほど、プラスに影響していた。	活動は以下の3つに分けられる ①社会活動、②家事、③一人でする活動
多次元幸福感尺度(横山,1987)	①活発性志向の態度の態度グループでは幸福感和活動量が多いけれども、相関は特徴がなく小さい。②非活発性志向の態度グループは、共に少ないが全サンプルにおいて社会的活動と関係の深かった幸福感の次元と活動の関係は一層強くなり、次元による差が明瞭になった。	活動に対する態度尺度
Lawton,M.P.らが開発したPhiladelphia Geriatric Center Morale Scale(以下PGM)の改訂版での17項目を日本版に翻訳したもの	「ADL」と「医療受診状況」といった身体能力や健康度は男女ともにモラルに有意に影響し、男性は「小遣月額」が強い規定力を持った。「活動レベル」の高い者ほどモラルが高い傾向が見られた。女性は「居住歴」が影響を及ぼしていた。	性別、年齢、ADL、現在の受診、配偶者の有無、世帯類型、居住年数、住居形態、教育歴、小遣月額、現在の就労状況、1ヶ月間の外出頻度、電話や手紙の発信回数、スポーツ、散歩、新聞購読、家庭内役割活動水準指数

表4-1 海外との比較研究

文献	著者(発表年)	目的	対象	調査方法
28	河合千恵子 (1981)	老年期の男女が人生の意味をどの程度に、どのような仕方では体験しているのか、また人生の意味の体験の程度や仕方に精査があるのかを、PIL テスト形式A及びBを用いて調査考察したい。	1979年から1980年東京及び近隣の3市に居住する老人大学の受講生150名(男71人、女79人、平均年齢69.5歳)	会場で調査票配布し個別に回収した。
29	河合千恵子 (1982)	青年期か老年期までの女性たちが、自己の人生にどの程度の目的意識を持ち、また、どのような仕方では人生の意味や目的を体験しているのかを世代比較の観点から明らかにすること	1979-80年の青年群82人・成人前期群62人・中年期群71人・老年群64人	青年群には講義中に質問し配布、成人3群はランダムサンプリングには個人面接、任意抽出には留置法
30	杉山善朗・他 (1986)	高齢者のスポーツ活動と「生きがい」意識との関連を検討し、あわせてスポーツ活動の実際に関与する諸要因の影響を明らかにすること	1983年12月から1984年3月まで北海道在住高齢者415名(男124,女194,不明7)の完全回答者154名	老人クラブの集会にて自記式
31	杉山善朗・他 (1985)	50~59歳の「生きがい」意識と60歳以上の世代間比較をし、「生きがい」意識、性格因子の関わり、「生きがい」の規定因子の各種について調査研究を行った。	北海道江別市50-59歳までの男女を無作為抽出で290名の回答を得て有効対象者133名	戸別訪問し留め置き法によって回収
32	杉山善朗・他 (1986)	60歳以上の高齢者の就労実態とその諸条件および高齢就労者の諸特性、また生きがい意欲などを調べ、これら3者間の関連性を多変量解析分析検討して、今後のこの方面における対応策樹立の一助とすること。	札幌市内で就労している589人の60歳以上の高齢者、完全回答者は126名	高齢者対象には個別記入してもらったものをまとめて企業毎に回収、企業対象については郵送法により回答を求めた。
33	杉山善朗・他 (1990)	従来の研究知見をふまえて特養ホーム在園高齢者の生きがい意識に対して、とくにストレス・コーピング様式を柱とした健康・心理・社会面にわたる諸変数がいかなる影響を示すかを検討すること	1989年6月から1990年2月の札幌市内および近郊の2つの特別養護老人ホーム在園高齢者72名	半構造化面接調査
34	古谷野亘・他 (1984)	主観的幸福感の関連要因としてこれまで社会学並びに心理学の変数のみが取り上げられ、今回は身体的な老化の指標(医学的変数)を加えてそれらの間の関連性を明らかにし、その要因分析を行うこと	集団健診に応じた男214名と女243名の合計457名である。	集団健診
35	山本直示・他 (1989)	「生きがい」意識と「死に対する不安」、「死生観」、「情緒的サポート」の各高低レベルの間の関連を検討すること	1988年8月から10月において特別養護老人ホーム入園者127名と対照群が在宅者100名合計227名	在宅者には保健婦による訪問調査。施設入居者には施設訪問面接調査(健康状態などは担当職員が記入)

生きがいを測定するのに使用した質問紙など	結果(定義)	関連要因
PIL テスト形式 A は 20 項目からなる 7 ポイントの態度スケール、形式 B は文章完成法で、人生の意味について記述を求めるもの	人生の意味について回答し得ないものは男性 14.1%、女性 22.8%であった。生きがいについての回答では男性は「その他」が 33.8%で、次が「その日、その日を生きること」15.5%であった。女性は「家族・家庭」に 34.2%と「趣味」に 20.3%であった。人生の意味において女性は画一的であり、男性は多彩であることが明らかになった。	
PIL テストと生きがいに関する項目を追加。	成人の3群は PIL 得点が高く人生の意味や目的を明瞭に体験している。「生きがいについての自由回答は「子ども・家庭」に集中それぞれ 55%,52%,41%。「人生の目的」についても尋ね、類似していたが低かった。26%,37%,19%	年齢、教育年数、配偶関係、職業の有無
「生きがい」意識について21問(日本版 PGM)	①スポーツ活動は、体力増進だけでなく、社交関係の保持の意味が大きく、それが高いと「生きがい」意識も維持される傾向を持つ。②「生きがい」意識が低いとスポーツ活動の実態や意欲に消極的で、体力低下や外科の訴えも多い。	生活特性について問うもの8問、スポーツ・運動活動について22問
PGMX-Ⅲ「生きがい」意識尺度(杉山他,1981)	①55歳を境に50歳代前半と後半とでは後者は「生きがい」意識が低い。②積極的な生活姿勢や神経質でないことが「生きがい」意識の保持に強い関連性があった。③女性、持ち家、職業がサラリーマン、健康、サークル活動未加入、読む書籍が専門書や文学・芸術、子どもと同居予定の場合にプラス要因となっている。	①社会的諸特性(配偶者の有無、住居、学歴、健康、職業、社会活動、趣味)、②日本版モーズレイ性格検査
杉山ら(1981a)による日本版 PGM	60歳代で健康、持ち家があり配偶者が健在、比較的高学歴、家計の中心者として、社会活動を日常行っており、知的啓蒙を促す専門書の読者であることが高齢就労者の「生きがい」意識を強める日常生活上の基盤であった。	性別、年齢、配偶者、現在の住居、学歴、家計の中心者、健康状態、社会活動、読書、サークル・趣味活動、会社の業種、従業員数、身分、勤続年数、年収・年金、勤務内容、勤務時間、勤務形態、通勤時間、就労環境に対する満足度、仕事の継続
Lawton,M.P.らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scale をもとに杉山らが日本版として標準化した PGM(X-Ⅲ)	①他のものに積極的にエネルギーを分散する、②肯定的に思考を転換する、③他人と距離をおき選択的に接触する、④トラブルの原因を相手に求めるというコーピング様式が生きがい意識を増強させていた。	ストレス度、日大式 SDS 尺度、情緒・社会的サポート尺度(宗像,1986)、死への不安・死生観尺度(杉山ら,1986)、日常生活の悩み事に対するコーピング尺度(森山ら,1989)
改訂版 PGC モーラルスケール(Lawton,1975)	モーラルと自我強度の間には強い相関関係が認められた。関連要因の分析において男では小遣い銭月額、握力、女では、Bentonテストの正答数、身体の痛みの有無、学歴で正の大きな正準係数を得た。男女ともに夜間尿回数では負の大きな正準係数を得た。	健康度自己評価は4段階、社会活動は老研式アクティビティ・インヴェントリー(1977)、自我強度尺度(Barron,1953)の改訂版(下仲,1977)、医学的・心理学的・社会的な13の変数 eg,血清アルブミン値や平均血圧、学歴、配偶者の有無、など
PGMX-Ⅲ「生きがい」意識尺度(杉山他,1981)	「死への不安」が弱く、良質の「死生観」を持ち、「情緒的サポート」を強く認識するほど「生きがい」意識が高くなり、精神健康度や well-being な感情の増強と連関した。	①「死への不安」尺度(杉山ほか 1988)、②「死生観」尺度(杉山ほか,1987)、③情緒的サポート尺度(杉山,1988)、④社会的な生活特性調査票、⑤適応度評価表(竹川ほか 1982)

表4-2 海外との比較研究(つづき1)

文献	著者(発表年)	目的	対象	調査方法
36	石原治・他 (1992)	老年者一般に共通して用いることのできる主観的尺度に基づく心理的な側面を中心としたQOL評価項目を作成し、検討することを目的とした。	老人大学など受講者 545名(健康群)と外来通院する循環器病患者 324名(疾患群)	健康群には集団自記式、疾患群には個別に質問紙を渡して回答を求めた。
37	内藤佳津雄・他 (1989)	PGC モラールスケールと人生満足度目録に共通する主観的幸福度の因子を抽出し「満足度指標」を作成する。さらに各因子と自覚健康度の関係を検討する	老人大学受講者 467名とデイケアセンター通所者 148名	健康群には集団式、病弱群には個別面接法
38	藤田利治・他 (1985)	現在調査中の老人の健康調査に含まれている「生きがい」の一般的傾向について言及することが可能であり、アメリカの研究結果との対照を行うこと。	1984年9月から調査開始され東京都品川区、静岡県清水市、鳥取県中部地区の60歳から89歳をそれぞれの地区の住民票から1320人を無作為抽出し、調査途中の品川区以外は調査が終了しているが現在集められた3230人	訪問聞き取り法
39	藤田利治・他 (1989)	社会文化的環境の異なる3地域の大規模老人調査を実施し、老人の主観的幸福感の実態と関連要因についての検討結果を報告すること	1984年9月から1985年3月まで東京都品川区、静岡県清水市、鳥取県中部地区の60歳から89歳をそれぞれの地区の住民票から1320人を無作為抽出し回収できた3580人	訪問聞き取り法
40	谷口幸一・他 (1982)	自己概念に関する数種のスケールや人格の成熟度という観点から作成された検査法および自己像を投影すると仮定される人物画法を高年者のパーソナリティを反映する指標として選び、これらを性格変数として、それに関わる諸要因との関連を検討しようとした	1981年12月から1982年1月まで東京、千葉、埼玉、神奈川4都県の老人大学の受講生とその卒業生 215名(男性106名、女性109名)	自宅での自記式で老人大学で回収
41	下仲順子・他 (1995)	中高年に体験するライフイベントと体験したイベントが、心身面の健康に及ぼす影響を分析すること	1991年10月に東京都1区に居住する50歳～74歳の男女を無作為にサンプリングし回収のでき記入漏れのなかった3097票	面接と留置法
42	前田大作 (1988)	10年の高齢者の健康についての学際的な縦断的調査のデータ分析の結果を報告すること	1976年から5年ごとに行われた東京都小金井市のデータ第1回 69-71歳 422人、第2回 74-76歳 329人、第3回 79-81歳 250人(共分散構造分析は132人)	集団健診もしくは訪問聞き取り法

生きがいを測定するのに使用した質問紙など	結果(定義)	関連要因
現在の満足感、心理的安定感、将来に対する期待感、生活のハリ活力に関する項目、自制心・依存心に関する項目、余暇に対する態度、他者との関係、社会的地位などの満足感の31項目と疾患群には医師との関係、病気に対する項目の5項目を追加している。	現在の満足感、心理的安定感、生活のハリの3因子から4項目ずつ合計12項目を選び、再度因子分析を行ったら3因子の不変性を確認した。両群とも現在の満足感が高かったが、心理的安定感と生活のハリでは差が認められ身体疾患の有無がQOL尺度の一部に影響することがわかった。	
Lawton(1975)の改訂版 PGC モラールスケール 17項目、Neugartenら(1961)の LSIA20項目	自覚健康度の7項目が満足度指標の「達成感」、「幸福感」、「心理的動揺」、「老化の受容」に相関が認められ、背景要因となるだけでなく、主観的幸福感の独立した指標となりうる可能性が示唆された。	健康群も病弱群を合わせて因子分析したら同様に「達成感」、「幸福感」、「心理的動揺」、「老化の受容」の4因子があり各因子から3項目選び新しく満足度指標を作成した。自覚健康度は10項目の間に三件法で尋ねている。
PGC モラールスケールや自信度尺度から抽出した12項目からなる質問票	第1因子は体力・意欲の面での「士気」を反映した因子、第2因子は対人関係を含む「満足感」に関する因子が解され Lawton の結果とほぼ一致し日米で同様な構造が確認された。仕事・余暇・社会活動型の生きがいは士気の因子および満足感の因子と正の相関を示した。	Larson の研究成果を参考にして性、年齢、居住地域、配偶者の有無、家族構成、学歴、職業の有無、主観的健康感、手段的 ADL、身体的 ADL
PGC モラールスケールや自信度尺度から抽出した12項目からなる質問票で自覚的健康度、情緒的適応力、生活自信度、精神的老化度の測定を意図した。	主観的幸福感とは健康度自己評価がもっとも強く関連し、ADL、身体機能の損傷、地域、学歴などが関連していた。性差は大きなものではなかった。	Larson の研究成果を参考にして性、年齢、居住地域、配偶者の有無、家族構成、学歴、職業の有無、主観的健康感、手段的 ADL、身体的 ADL
Lawton, M.P. らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scale(以下 PGM)の改訂版での17項目を日本語に翻訳したもの	「健康であること」、「職業生活での成功」、「家庭の経済的条件に恵まれたこと」、「子どもに関する恵まれた体験」などのあるものはモラールも高い傾向にあった。一方「結婚生活上の苦労やトラブル」、「趣味・スポーツ・信心のない」者ほどモラールは低い傾向が認められた。	基本属性は居住形態、居住年数、満年齢、学歴、出生地、親の職業、同胞数、結婚歴、子どもの数および学歴、子どもの別・同居の別、職歴(職種・役職)、現職の有無、健康状態や経済状態、ライフイベント評価表、社会的自信度尺度、精神老化度尺度、成人度検査、成熟度、人物画法
Lawton, M.P. らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scale(以下 PGM)の改訂版での17項目を日本語に翻訳したもの	悪いイベント体験はモラールに対して2年後においても悪い影響を及ぼし、良いイベント体験は良い影響を及ぼしていた。縦断的な分析の中でさらに検討すべき課題と考えられる。	配偶者状況、家族構成、職業、教育歴、ライフイベント尺度、精神健康調査票、自尊感情スケール、人格目録、ソーシャルサポート、夫婦関係満足度尺度、親子関係満足度尺度、ライフスタイル、疾病や入院の有無、身長、体重、血圧、握力、夜間尿回数、主観的健康感、老研式活動能力指標
Lawton, M.P. らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scale(以下 PGM)の改訂版での17項目を日本語に翻訳したもの	モラール得点の変化に有意の影響を及ぼしたのは男性では「配偶者関係の変化」、「痛みの変化」、「主観的健康感の変化」、「活動水準の変化」、女性では「主観的健康感の変化」であった。	性別、教育歴、配偶者の有無、痛みの有無、体格、活動水準、精神的能力、主観的健康感

表4-2 海外との比較研究(つづき2)

文献	著者(発表年)	目的	対象	調査方法
43	前田大作・他 (1988)	都市の在宅老人のモラルの研究の際と全く同じサンプルを4年後に追跡調査し、その間の変化と変化に影響を及ぼす要因について縦断的に研究した結果を報告すること	1982年に都内18地区在住の60歳以上の男女500人から回収された345ケースの中から1986年に第2回目の調査ができた221人	郵送留置
44	本間善之・他 (1999)	地域高齢者における身体・社会活動の生命および活動的日常生活の喪失に対する影響を明らかにするため、36か月間の追跡調査を行った。	1992年9月に佐賀県多久市・小城郡内に在宅していた70歳以上の高齢者7406人のうち日常生活動作がすべて自立し、追跡可能であった6274名(男:2383人、女:3891人)	社会調査
45	中西範幸・他 (1997)	地域で生活する65歳以上の高齢者を対象として、支障、健康管理、および社会生活に関連する要因を取り上げ、生命予後に関与する要因を明らかにする中で、それらの意義と重要性について検討すること	1992年10月時点で65歳以上であった大阪府S市民6674人から無作為に抽出した1491人の中から1405人の有効回答が得られ、追跡可能であった1325人(内154人死亡)を分析対象とした。	訪問留置法

生きがいを測定するのに使用した質問紙など	結果(定義)	関連要因
Lawton, M.P. らが開発した Philadelphia Geriatric Center Morale Scale (以下 PGM) の改訂版での17項目を日本版に翻訳したもの	4年間の追跡研究の結果、モラール得点の平均値は男女ともに若干上昇したが統計学上の有意差はなかった。第1回モラール得点に「現在の受診」と「ADL」が有意に影響を及ぼしていたが、第2回では「現在の受診」は影響力を失い、「年齢」と「配偶者の有無」が有意な影響力を示した。男女間でも第1回、第2回のどちらでも全く違う要因が働いていた。	性別、年齢、ADL、現在の受診、配偶者の有無、世帯類型、居住年数、教育歴、活動水準指数
性別、調査時点での年齢階級、身体状況の項目、障害の状況、居住環境の問題点、困窮時の相談先、健康行動の状況、現在やっていることややっていることのうちの生きがいを感ずること、やりたいことの有無	活動的日常生活を喪失したものは 965 人であった。うち死亡は 449 人であった。年齢、低い自立度、家屋構造の問題点の存在が活動的余命、生命予後の短縮と、健康行動や日常活動、生きがい、やりたいことの存在が活動的余命や生命予後の延長と関連することが示唆された。	性別、調査時点での年齢階級、身体状況の項目、障害の状況、居住環境の問題点、困窮時の相談先、健康行動の状況、現在やっていることややっていることのうちの生きがいを感ずること、やりたいことの有無
生きがいの有無とありの場合の内容。	社会活動への参加と生きがいは、性と年齢をコントロールした分析では死亡と有意な関連を認めたが、支障や健康管理の影響を除くと有意な関連がみられなかった。	性別、年齢、支障(障害)、健康管理状況、社会生活の状況

## The Review of IKIGAI on the Relationship of Ikigai and Well-being in the Elderly

Akihiro Hasegawa\*, Yoshinori Fujiwara\*\* and Tanji Hoshi\*\*\*

\*Graduate Student, Tokyo Metropolitan University

\*\*Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology

\*\*\*Graduate School of Urban Science, Tokyo Metropolitan University

*Comprehensive Urban Studies*, No.75, 2001, pp.147-170

This paper reviews evidence concerning the relationship of IKIGAI and Well-being in the elderly people. The word "IKIGAI" has a meaning peculiar to Japan, and includes various concepts. The word "IKIGAI" from Japanese translates into English, it would be similar to self-actualization, meaning of life, purpose in life. The purpose of this paper is considering as the data at the time of arranging the result including the definition reported by "IKIGAI" research and the related factor. We would specify a definition of "IKIGAI" newly, and considering a future subject and the direction of research. The reference reported until now was surveyed and "IKIGAI" was defined newly as follows "IKIGAI" is work of the mind which unified an "object" and "the feeling by which it is accompanied", when person inquired as "What is your IKIGAI ? ", "object" includes a past experience, the present occurrence, and the image of future. On the other hand, "the feeling by which it is accompanied" includes the various feeling of the springing self-actualization and will, life fullness, useful volition, and the feeling of presence, the feeling of the intended movement.

If the simple measure which can measure "IKIGAI" in deployment of future research, and the standardized question are completed, the original research which explores medical treatment, health, welfare, and not only a gerontology but Japanese culture will be attained, and the difference by the place-of-residence region in and outside the country can also be considered. Moreover, since "IKIGAI" deals in the indicator of an individual way of life, it would be an interdisciplinary research subject.